目次

第1部 発端 3
第2部 帰国 88
第3部 反攻 186
第4部 逆襲 286

堂場瞬一著『ラスト・コード』立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～47頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。

●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

第1部　発端

1

何か、和む……。

グラウンド全体を見下ろせる、小高い丘。美咲にとって、ここは孤独で穏やかな時間を楽しめる貴重な場所だった。何しろ普段は、いつでも近くに誰かがいる。学校だけではなく、寮でも友だちと一緒。気のいい仲間たちばかりだけど、時々息が詰まる。

中学生で、いきなりアメリカの全寮制の学校に放りこまれるのは、結構タフな経験だ。

他にも選択肢はあったと思う。父親の勧めに抵抗して、日本で普通に中学校に通ってもよかったのだし。でも、母親が亡くなって以降、ますます家のことを顧みなくなった父親から留学の話を聞かされた時には、一瞬も考えないまま、首を縦に振ってしまった。

あの家には、家族はなかった。「父親という立場の男」と住んでいただけ。父親にすれば、アメリカの教育で娘の才能を伸ばしてやろうという気持ちだったかもしれないけど、本音では厄介払いしたかっただけだろう。何しろあの人の頭の中には、自分の研究のことしかないんだから。そもそも、家族なんか持っちゃいけない人だったんだと思う。ママも、よくあんな人と結婚する気になったわよね

……明るく美しい母親の面影を思い出すと、少しだけ風景が歪(ゆが)んだ。
そんなはず、ない。
もうとっくに乗り越えたんだから、泣くわけがない。あの時、一生分泣いたし。大きく目を見開いて、グラウンドを駆け回る選手たちの動きを凝視する。そうすると自然に目が乾き、視界がはっきりしてくるから。
乾いた暖かな風が、頬(ほお)を撫(な)でていく。海が近いせいか、かすかに潮の香りがした。そこに、丘一面に生えた長い芝生から立ち上る緑の香りが混じる。日本の学校では、校庭は埃(ほこり)っぽい臭いしかしなかった。髪が乱されて顔にかかるのが嫌で、後ろで一本にまとめて縛る。頭の皮膚(ひふ)がきゅっと後ろに引っ張られる緊張感が心地好い。
もうすぐ夏休みなんだ、と改めて思う。アメリカに来て初めての夏休み。去年のクリスマス休暇には、慌てて――それこそ最後の授業が終わってすぐ、寮を出た。父親に会いたかったわけではなく、ただ日本の空気を吸いたかったから。あの時は、自分がひどく弱くなった感じがした。言葉には不自由していなかったし――幼稚園の頃から英会話学校に通わせてくれた母親に感謝――授業も簡単についていけるレベルだったが、やはり環境の変化で、気持ちは歪んだはずだ。
でもあの時、家には一度行っただけだった。年末年始だというのに、父親が一軒家への引っ越し準備をしていて……懐かしいマンションの部屋は滅茶苦茶で、とても寝る気にはなれず、ずっとホテルに泊まっていた。あんなことなら、帰国しない方がよかったと思う。どうせ、日本には友だちなんかいないんだし。
で、何をしていたかというと、毎日本を読んでいた。神保町(じんぼうちょう)の書店街へ通っては右から左へ本を買い、読み終えたらそのまま古書店に流す。本の内容は、自然に頭の中に残っていった。

短い春の休みには、帰国しなかった。そして夏――。

迷っている。日本では友だちがほとんどいなかったが、驚いたことにアメリカでは親しい仲間ができた。夏休みになれば、寮からは人がいなくなってしまうけど、「家に遊びに来ればいい」と誘ってくれる友人もいる。ちょっとしたホームステイ、そしてアルバイトもしてみたい。十四歳で、何の仕事ができるかは分からないが、もう日本での生活に未練はなかった。

日本に行けば、どうしても父親に会うことになる。それが嫌だった。親戚もいない、二人だけの家族なのだから、必然的に家に帰るしかないわけで……息が詰まるのは簡単に想像できる。帰らなくてもいいよね、と自分に言い聞かせる。父親は何も言ってきていないし、ずっとアメリカにいたっていいはずだ。とにかくあの人は、私が邪魔なんだから。ずっとアメリカに住んで、将来は本当にアメリカ人になってしまうことが、親孝行なんだと思う。

でも、そもそも親孝行がそんなに大事？　あの人は孝行すべき対象なんだろうか？

「ミサキ？」

声をかけられ、振り向いた。一本に縛った髪が揺れて、頬を軽く打つ。美咲は小さな笑みを浮かべて手を振った。寮の部屋で一緒のアイリーンが、息を切らしながらこちらに歩いてくる。標準体重をだいぶオーバーしているが、丸い顔に浮かぶ笑顔は天下一品だ。夢である女優になるためには、相当のダイエットを覚悟しなければならないだろうが、彼女の笑顔を大きなスクリーンで観られたら、自分も嬉しい。

「また、こんなところで」

「孤独を楽しむ時間も必要なの」

「何、格好つけてるの？」

「別に」
横に立ったアイリーンが腕を絡ませてきた。ぽってりとして冷たい素肌の感触が心地好い。
「夏にうちに来る話、考えてくれた？」
「ああー、そう……たぶん、お邪魔することになると思う」
「そう？　よかった。ママが楽しみにしてるんだ」
そのママは、アイリーンに百ポンドほど肉をつけただけで、容貌はそっくりだ。初めて写真で見た時には、笑いを堪えるのに必死になった。アイリーンは、ダイエットに成功して女優になるか、あるいは遺伝と環境のせいであと百ポンドの肉を身につけることになるのか。女優になりたいという気持ちが本物なら、自分も手助けするつもりだった。まず、彼女が隠しているスナック類を密かに処分し続けること。この追いかけっこは二人の間では定番のゲームで、見つけて没収した翌日には、戦利品としてクラスメートに分配される。
「ロスは初めてなんだよね？」
「ここ以外、どこも行ってないから」
実際、ほとんど学校と寮に缶詰状態なのだ。アメリカでの学園生活がどんなものか、まったく予備知識もなしに来てしまって――我ながら大胆だったと思う――驚くことばかりだった。
どこかへ出かけようと思っても、学校の周りには何もない。近くを鉄道とフリーウェイが通っているだけで、学校のすぐ裏は禿山だ。食事は全部寮で済ませるから困らないけど、暇潰しができない。一番近いショッピングセンターだって、二キロほども離れている。
空が高い。背の高いビルがないせいだけど、地面が直接空につながっていく感じは、東京では絶対に味わえないものだった。それはそれで快適だけど、心が晴れることはない。

私はこれから、どこへ行くんだろう。

流されるつもりはないけど、自分の意思もない。時々父親に対する文句を思い浮かべながら、それでも自分で何とかしよう、という気持ちだけは殺さなかった。何でも話せる友だちはできたし――日本では考えられないことだった――これからゆっくり時間をかけて考えていけばいいんだから。高校までは、一貫制のこの学校にいて、その後アメリカの大学に進んで。そこまでは想像できる。でも、その後はどうすればいいんだろう。どうしたいんだろう。

「また、難しい顔してる」アイリーンが美咲の肘を小突いた。

「あ、ごめん」彼女の指摘は正しい。ここのところ、気づくと眉間に皺が寄っている。これじゃ、十四歳の顔が台無しだ。中指で眉間を擦り、唇を大きく横に引き伸ばした。

「それでよろしい。笑った方が可愛いよ」気取った口調でアイリーンが言った。「何か、考え事？」

「これからのこととか。まだ何も決められないから」

「そうか。ミサキは複雑だからね」

彼女には、家の事情をすっかり話している。母親が亡くなったこと。技術者の父親が変わり者で、どうも自分は邪魔にされているらしいこと。最初に話をした時、アイリーンが涙を零したので、美咲は動転した。普通、人のことで泣く？　作り話かもしれないのに……自分なら、真っ先にそれを疑うだろう。だが、友人になったばかりのアイリーンの涙は沁みた。今まで、自分のことでこんな風に泣いてくれた人はいなかった。

「夏休み、楽しみじゃない？」アイリーンが屈託のない笑みを見せる。

「そうだね」

「いろいろ計画してるから。本番まで秘密にしてることもあるからね」

「楽しみにしてる」
ふと、腿の所で振動を感じた。携帯……私に電話してくる人なんかいないはずなのに。まさか、父親？　あり得ない。あの人は、私がアメリカに来て以来、一度も直接電話してきたことがないのだ。普段はメールだけだし、それだって月に一回あるかどうか。一種のコミュニケーション障害に違いない。
電話に出ると、初めて聞く声が耳に飛びこんできた。重苦しい、辛そうな声。だがその奥に、かすかにほっとするようなニュアンスが滲んでいる。話を聞いているうちに、それも当然だろう、と思った。相手は肩の荷を降ろしたのだから。若い人みたいだから、こんなことは到底背負えないはずだ。きっと、面倒な仕事を押しつけられたのだろう。
ゆっくりと電話を耳から離し、終話ボタンを押す。泣けない自分が嫌になった。こんなに冷静、というか冷酷な人間だったかな……失神してもおかしくないような話だったのに。
「大丈夫？」
アイリーンが美咲の腕に掌を乗せる。携帯電話が手から零れ落ち、芝生の上で跳ねた。それを見てアイリーンが眉をひそめる。
「夏休み……」
「え？」
「夏休み、あなたの家に行けないかもしれない」
「どういうこと？」
「パパが殺されちゃった」

2

「ひでえな、おい」
先輩の声が耳を通り抜けていく。筒井明良は、唇を引き結び、必死に吐き気を堪えていた。目の前で死んでいる男……その姿よりも、臭気が吐き気を呼ぶ。強烈な血の臭いに加えて、排泄物の臭いがひどい。殺されると、死ぬ瞬間に肛門が緩んで――という話は聞いてはいたが、実際にその現場に立ち会うと衝撃は大きい。
唾を呑むと、粘膜が擦れる感覚で吐き気が助長される。
「吐くなら、ここは駄目だぞ。我慢しろよ」
「……大丈夫です」先輩の長沢に言われ、もう一度唾を呑みこむ。唐突に吐き気が引っこんだので、現場の様子を何とか記憶に収めようとする。
真新しい一戸建ての家のリビングルーム。広さは十五畳ほどあるが、あちこちに物が散らばっているので、かなり狭く見えた。部屋の片隅には、新聞が積み重ねられている。いったい何か月分なのか……ソファの背には背広とワイシャツがかけられており、六月なのに何故か、丸められたトレンチコート――しかも裏地つき――が座面に置かれている。血の臭いに慣れると、かすかな汗の臭いが漂っているのにも気づいた。これは、あれだ……高校の部室の臭い。男の一人暮らしなのだろうが、それにしても雑である。だいたい、家具が真っ直ぐ置かれていない。ソファとテーブルの位置が揃って

いないし、ダイニングテーブルも窓に対して斜めになっている。これだけ置き位置が滅茶苦茶だと、部屋が狭く見えるのも当たり前だ。

いや、実際には犯人と格闘になり、家具が定位置からずれた可能性もある。いわゆる「争った形跡」というやつだ。だが、ソファに置いてあるコートやワイシャツは、この家の主のいい加減な性格を示している。

「死体を調べるぞ」

長沢に促され、筒井は我に返った。長沢はラテックス製の手袋をはめ直し、ゆっくりと死体に近づいて行く。筒井はその後に続き、彼の肩越しに死体を覗きこんだ。死体は仰向けに倒れており、胸から腹にかけてが真っ赤になっている。白いジャージを着ているせいで、血の赤――赤いのは殺されて間もないせいだ――がひどく鮮明だった。正面から何度も刺され、力尽きて仰向けに倒れこんだようである。右足が折れ曲がって尻の下になり、体が奇妙に捻れていた。何故か右目だけが薄く開いている。唇の隙間からかすかに見える歯が、やけに汚いのに気づいた。喫煙者か……後ろを振り返ると、テーブルに灰皿と煙草の箱が置いてあるのが見える。灰皿は直径二十センチほどもあるガラス製だが、吸殻で一杯だった。縁まで溢れるほどになってから、ゴミ箱へ持って行くタイプなのだろう。

長沢が死体の脇で膝を折った。鑑識の到着を待っているので、直接手は触れない。舐めるように視線を這わせながら、死体の様子を観察した。筒井は恐る恐る長沢の脇で床に膝をつけ、死体を見た。また唾を呑み、何とか吐き気をこらえる。

ジャージが胸から腹にかけて大きく裂けているのは、襲撃の激しさを物語る。犯人は夢中になって刺したはずで、床に零れ落ちた血の量から見て、かなりの返り血を浴びている可能性が高い。

カーテンが開いているので、外に停まったパトカーの赤色灯の光がもろに入ってきて、部屋を黒と

赤の斑に染め上げる。その中に浮かび上がる死体は、やはりグロテスクだった。
「ナイフか何かだろうな」長沢がぽつりと言って立ち上がる。「傷は一か所じゃない」
「滅多刺し、ですか」
「そんな感じだ」
筒井は何故か立てなかった。腰が抜けたわけではないが、吐き気が治まると、意識が死体に吸いこまれてしまう。殺人事件の現場で初めて見る死体。死体そのものは今まで何度も見てきたが、殺人事件の被害者は初めてで、その違いが気になった。突然、悪意によって命を奪われた死体……人の感情が見えるわけはないが、無念さが立ち上ってくるような気がする。
顔のせいか？　そういうわけでもない。死に際して苦しんだ様子はないし、半分眠っている――寝ぼけていて、今にも目を覚ましそうな様子だ。
「おい、ここは鑑識に任せるぞ」
声をかけられ、ようやく立ち上がる。長沢は、死体に向かって両手を合わせていた。筒井も慌ててそれに倣う。死体に敬意を払え――無念さを感じ取り、犯人逮捕の推進力にしろ。この春の異動で渋谷中央署の刑事課に来た時、最初に言われた台詞を思い出す。常に人の死に向き合うことになるが、それに慣れるな、というアドバイスも。死体を単なる「物」として扱わず、命を失った人、と見なければならない。
その感覚はまだよく分からなかったが、筒井はやけに肩が凝っているのを意識した。知らぬ間に緊張していたのだろう。
「課長たちと合流しよう。お前も初現場だからな、張り切っていこうぜ」
「分かりました」玄関へ引き返し、ビニール製のオーバーシューズを脱ぐ。血を踏んでいないかと心

配になって確かめてみたが、オーバーシューズは綺麗なままだった。
外へ出ると、雨。梅雨に入ったばかりで、肌寒い陽気である。上着は着ているのだが、思わず身震いした。長沢が傘もささずに、近くの路上に停めたワンボックスカーに走って行く。筒井は最後に乗りこんだ。雨脚が意外に強かったせいで髪が濡れており、フロアに水滴が落ちる。ハンカチを取り出して乱暴に髪を擦ると、鋭い視線が一斉に集まった……慌ててハンカチをズボンのポケットに突っこみ、ドアを閉めてシートに腰かけた。
刑事課長の本間が腕時計に視線を落とし、箇条書きのように状況を説明する。
「機捜が、現在周辺を捜索している。交通課と交番の連中は山手通りを検問中。今のところ、犯人らしい人間は引っかかってこない。それと、捜査一課が間もなく臨場する」
特捜本部事件になるのか……犯人の分からない殺人事件だから当然だが、筒井はまた唾を呑んだ。今夜はやけに喉が渇く。捜査一課が入ってきて特捜事件になれば、自分など単なる歯車になってしまうのはよく分かっているが、それでも背中にのしかかる責任の重さは簡単に想像できる。
腕時計を見る。今、午後十一時五分過ぎ。時間軸を巻き戻して、ここまでの出来事を整理する。
近所の人から「近くの家で大きな音がする」と一一〇番通報があったのが、午後十時十五分。すぐに所轄に連絡が入り、パトカーが現着したのがその七分後だった。既に「大きな音」は聞こえなくなっており、家のドアは細く開いていた。制服警官が中を確認して、遺体を発見したのが十時二十八分。それから署の当直に改めて連絡が入り、自分の携帯が鳴ったのは十時三十五分頃だった。着替えるのももどかしく家を飛び出したのが、その七分後。タクシーを飛ばして現場に入り、死体を確認――というタイムラインだ。
本間の指示を聞きながら、ネクタイを締め直す。慌てていたので、選ぶ間もなく適当に締めてきて

しまったのだが……失敗だったか、と悔いる。黒に濃紺の細いストライプが入っており、遠目にはほとんど黒一色に見えるだろう。スーツも黒で、まるで葬式に参列するような格好だ。もちろん、人が死んでいるのだから、赤や黄色のネクタイをしてくるわけにはいかないが、これはいかにも縁起が悪い。

まあ、そんなことを考えても仕方ない。自分がここにいるのは、おまけのようなものなのだから。戦力としては誰も期待していないはずだ――と自虐的に考えてしまう。

「被害者は一柳正起、四十五歳と見られる」本間は断定しなかった。中指で眼鏡を押し上げ、手帳に視線を落とす。「まず、身元の確認を急げ。家族構成は……手元の情報だと一人暮らしだが、その確認も頼む。一課が入ってくるまでに、基本情報ぐらいは押さえておきたい。あとは、近所の聞き込み。なお、容疑者が見つかった場合は、そちらの確保に全力を尽くす」

その指示に、筒井は胸の奥が痛むのを感じた。現場で犯人と対峙する……後悔と恐怖が胸に満ちてくる。本間が厳しい表情で話を締めくくった。

「以上。今後の指示は聞き逃さないように。筒井も初めての殺しの現場だが、頼むぞ」

本間が無理に強張った笑みを浮かべる。何もわざわざ俺の名前を挙げなくてもいいのに……筒井は、長沢と一緒に、一一〇番通報してきた人から話を聴くよう、命じられた。

刑事たちが一斉に立ち上がる。筒井は頭を低くしたまま、一番先に外へ出た。少し強くなった雨が頭を濡らす。安物とはいえ、これではスーツが台無しだ。隣に並んで歩き出した長沢は、ワイシャツの上に直に、濃い灰色のマウンテンパーカーを着こんでいる。撥水性が高いようで、弾かれた無数の雨滴が付着していた。雨を見越してスーツは避けたのか……さすがに準備がいいと思ったが、長沢は自分とは二歳しか違わない。それでも自分よりずっと場数を踏んでいるのは間違いなく、こういうと

ころに経験の差が出てしまうのだろう。
見られているのに気づいたのか、長沢が腕を振るってパーカーの袖から雨滴を払い落とす。
「これ、一枚あると便利だぞ」やけに優しげな笑みが浮かんだ。
「そうですよね」
「雨合羽になるし、寒い時はコート代わりに使える。俺はいつも、ロッカーに入れておくんだ」先輩らしいアドバイスのように聞こえるが、会話が切れないように気を遣っているだけなのは分かった。例によって、腫れ物に触るような扱い。
「今夜、どこにいたんですか？」
「署にいたよ」
「何か仕事、あったんですか」やっぱり俺だけのけ者か。頬が引き攣る。
「いや、何となくね。近くで飯を食ってるうちに遅くなって……何だよ、何か不満か？」
「いや、別に」気は遣っていても、夜の食事に誘うのは気が進まないわけか。それはそうだろう。面倒な男とわざわざつき合う人間はいない。
余計なことを考えるのは禁止だ、と自分に言い聞かせる。まずは仕事に専念しないと。しかし、一つのことが気になっていた。
「課長、さっき被害者の名前を断定しませんでしたね」
「ああ」
「一柳さんで間違いないんでしょう？」
「可能性、九十九パーセント、ぐらいかな」
「ああ」その言い方で合点がいった。「もしかしたら、死んでいるのは犯人かもしれませんよね」

「揉み合いの末にってやつかな」長沢が両手を擦り合わせた。
「じゃあ、一柳さんは？」
「それこそ、怖くなって家から逃げたとか」
一応うなずいたが、そのシナリオに無理があるのは分かっている。家にいた誰かと喧嘩になり、主である一柳がその「誰か」を滅多刺しにして逃げる――考えにくい。それに、被害者は家の中で着るようなジャージ姿だった。訪問者――殺人者がそんな格好をしているとは考えにくい。
東急代官山駅に近い現場付近は、一戸建てが建ち並ぶ住宅街で、夜になると人通りも少なくなる。しかし今は、何台ものパトカーが路上を埋めて赤い灯りを投げかけ、現場を見ようと恐る恐る家を出て来た人たちの顔が、あちこちから覗いていた。制服組が被害者宅の周りに規制線を張り巡らせているが、そのぎりぎりまで押しかけるような野次馬はいない。高級住宅地ならではの、控え目な空気。それで少しは気が楽になったが、早く事件を解決しないとプレッシャーが高まりそうだ、と焦りを覚える。確かこの辺には、政治家や会社の経営者も多く住んでいるはずだ。「高級住宅地で、こんな事件を起こすな」と圧力が高まってくるのは容易に想像できる。
「よし、行くぞ」気合いを入れて歩き出した長沢の後を追う。彼は、一柳家の二件隣の家まで早足で歩き、すかさずドアをノックした。ここも規制線の内側に入っており、周辺には警察関係者しかいない。
すぐにドアが開き、女性が顔を見せた。こんなに遅い時間だというのに、薄い化粧をしているのを見て、筒井はかすかな違和感を覚えた。警察が事情聴取に来ることを見越して、化粧し直したのか……気にするポイントが違うだろう、と白けた気分になる。
長沢と筒井は、すぐに玄関に入った。女性の緊張した様子から見て、玄関から先に進むのは難しそ

うだが、取り敢えず外の音は遮断しなければならない。筒井はゆっくりとドアを閉めた。当然、鍵は開けたまま。ちらりと足元を見ると、スニーカーが二足出ているだけで、玄関は綺麗に片づいていた。

長沢が質問をぶつける後ろで、筒井はメモ取りに専念した。

女性は、和久井絵津子、四十二歳。家族は夫と子ども二人。夫はまだ帰宅していなかった。小柄な女性で、髪は短くまとめている。丈の短い白いブラウスに、淡い水色のハイゲージのカーディガンという格好だった。

「物凄い音がしたので……心配になって会社にいる夫に電話したんです。そうしたら、警察に連絡した方がいいって」

「どんな音でした？」と長沢。

「何か物が割れるような……ガラスとかじゃなくて、もっとくぐもった音で」

筒井は家の中の様子を思い出した。液晶テレビが倒れて、床の上で画面が砕けていた。どれぐらいの音量だったかは分からないが、彼女はその音を聴いたのだろうか。

「何分ぐらい続いたんですか？」

「二分か三分……それから、悲鳴が聞こえたんです」

「男性の悲鳴ですか？」

長沢は、どうして分かりきったことを聴いているのだろう、と筒井は訝った。だがすぐに、相手の記憶を確かにするための軽い誘導尋問なのだと納得する。

「はい」

「どの時点でご主人に電話したんですか？」

「悲鳴が聞こえてからすぐです。何か、物凄い悲鳴だったから……」

「どんな感じの？」
「それは、『ギャー』って……物凄い大声でした」
「一柳さんの声でしたか？」
「分かりません」絵津子が首を振った。「話したことないですから。ご近所だけど、ほとんど会わないんです。あの家から聞こえてきたので、そうなんだろうと……」
「あの家なんですけど、一柳さんは一人暮らしなんですか？」
「そうだと思いますけど、あまりつき合いがないので……」
「一柳さんは、どんな人なんですか？」
「ほとんど顔を見たこともないんですよ。出かけるのは朝早くだし、夜も遅いみたいです。帰って来ない時もあるんじゃないかしら」
　顔を見たことがない、と言う割には、よく観察しているものだ、と筒井は感心した――というか、少しだけ嫌な気分になった。何となく、隣人を監視しているような……刑事としては、昔ながらの近所のつながりがあるのはありがたい限りだが、仕事を離れて都会に住む三十歳の独身男に戻れば、余計な干渉は煩わしい。一人暮らしのマンションでは、他の住人とすれ違えば互いに軽く会釈ぐらいはするが、言葉を交わしたことは一度もない。ほとんどの部屋が１ＬＤＫなので、独身のサラリーマンや学生が多いはずだが、隣に住む人が何者かも知らなかった。
「ここからだと、様子はよく分からないですよね」長沢が念押しする。「家が一軒挟まってるし、横並びだから」
「そうですね。本当に、たまに顔を見かけるぐらいで」
「昔からここに住んでいたんですか？」

「いえ、確か、今年の始めに引っ越してきたんです」
「一人で？」
「その時は一人だったと思います」
「引っ越しの挨拶はなかったんですか？」
「それが……」絵津子の顔に戸惑いが広がる。寒くなってきたのか、何か怖いことを思い出したのか、一度大きく体を震わせた。「挨拶はあったんですけど、ちょっと普通と違った感じで」
「というと？」
「郵便受けに、タオルが突っこんであったんです」
「突っこんであった？　挨拶もなしで？」長沢が顔を上げ、疑問をぶつけた。両目が細くなっている。
「ええ、こう、無理矢理……箱が斜めになってました」
筒井は、玄関の外にあった郵便受けを思い出した。アメリカの家で見かけそうな、かまぼこ型の洒落たデザインだが、それほど大きくはない。タオル入りの角ばった箱が無理矢理突っこまれ、風が吹けば落ちそうに揺れている光景が目に浮かんだ。
「いきなりタオルだけ入れてあったんですね？」長沢は一歩前に出て念押しした。
「ええ。だから最初は、気味が悪くて。ご近所の方に聞いてみたら、どこの家も同じだったようです」
これは相当の変わり者だ、と筒井は首を傾げた。近所に引っ越し挨拶をするのは、いかにも礼儀正しい。最近では廃れた習慣を律儀に守っているわけだが、その挨拶が言葉ではなく、いきなりタオルを投げこむとは……。
「話したことはないんですか」長沢がさらに突っこんだ。

「ええ」絵津子が顎に人差し指を当て、天井を仰いだ。「ないですね、一度も」
「じゃあ、近所づきあいは全然なかった、ということなんですね？　顔を見たら分かりますか？」
「それぐらいは」
　まさか、長沢は死体の写真を見せるつもりなのだろうか。現場で簡単に撮影した写真は、指揮車の中で既にプリントアウトして、刑事たちに配られている。顔が血に染まっているわけではないが、確認のためとはいえ、死体の写真を見せて問題ないのだろうか。心配していると、長沢は写真を見せる代わりに、死体の容貌を説明し始めた。
「髪が長目で、少しウェーブがかかっている感じですか？」
「そうですね」絵津子が自分の髪をそっと押さえた。「耳が隠れるぐらいで」
「細面ですよね。顎なんか、きゅっと尖った感じで」
「ええ」
「髭は生やしていましたか？」
「覚えてませんけど、無精髭みたいなものは……」絵津子が首を傾げる。
「鼻の横に黒子があったの、覚えてませんか」
「ああ、確かにそんな感じが……」頬に手を当てて、また首を傾げる。少し「言わされている」感が強い。長沢の質問はあまりにも矢継ぎ早で、相手に考える時間を与えない。
「白いジャージを着ているのを、見たことありませんか」筒井は思わず割りこんだ。部屋着にするジャージで、「白」を選ぶ人は案外少ないのではないだろうか。汚れが目立つのだ。
「ああ、ありますよ」今度は絵津子の答えは明快だった。「真っ白で。その格好で、新聞を取りに出てきたところを見たことがあります」

「アディダスなんですけど」
「ブランドは分かりません」
「どこにお勤めかは分かりませんか？」長沢が訊ねる。
「さあ、どうでしょう。聞いたことがないですけど」
「普通のサラリーマンですかね」
「普通のって、銀行とか商社とか、そういう職種ですか？」
「ええ」
「違うと思います」今度ははっきりと断言した。「ネクタイをしているのを見たことがないですから。スーツは着てましたけど……ジーンズ、ということもありましたよ」
「ＩＴ系とか？」
「そうかもしれません」
「どなたか、近所で親しかった人はいないんですかね」
「それは……いないと思いますよ」絵津子が顎を強張らせたまま首を振った。
「あの家に出入りしていた人、いませんかね」
「どうでしょう」絵津子が頬に手を当てた。「見たこと、ないですね。宅配便の人が来ることぐらいはあったかもしれないけど、誰かが訪ねて来るようなことは……なかったんじゃないでしょうか」
「そもそも独身かどうかも分からないですよね」
「独身じゃないんですか？」絵津子が目を見開く。
「いや、家族と離れて暮らしているとか……」
「家族が別にいるなら、わざわざ一戸建ての家に引っ越してきたりしないんじゃないですか？　それ

に、結婚指輪、してませんでしたよ」
長沢が、自分の左手に視線を落とす。
「私も結婚してますけど、指輪ははめませんよ。男なら、そういうのも珍しくないでしょう」
「ああ、まあ……」絵津子が口ごもる。「それはそうですね」
そのやり取りを最後に、二人は家を辞した。絵津子は冷静に応じてくれたが、満足な情報が取れたわけではない。勤め人らしい。かなり変わっている――分かったのは、ほぼそれだけだった。同情さえもない。殺されていたのが一柳だと確定したわけではないし、そうだとしても普段のつき合いがないから当然かもしれないが……それにしても、近所の人が殺されたとなったら、もっと衝撃を受けるのが普通ではないだろうか。涙も恐怖もなし。それだけ、一柳は変わり者、異分子と見られていたのかもしれない。
まあ、何とかなるさ、と筒井は楽天的に考えた。区役所で住民票を確認すれば、いつ、どこから引っ越してきたかは分かる。この近所では情報を得られなくても、以前住んでいた場所で聞き込みができるだろう。それに勤め先が分かれば、個人情報は一気に流れこんでくるはずだ。近所とのつき合いがない中年の独身男性のデータは、会社に集中している。一柳が自分の時間のほとんどを仕事に注ぎこんでいても、不自然ではない。
事情聴取していた短い間に、事態は急に動き始めていた。家を出た瞬間、無線から情報が流れてくる。
「被害者の一柳の勤務先が割れた。今、会社の人間がこちらに向かっている」本間の声は、少しだけ緊張していた。
筒井は思わず、長沢と顔を見合わせた。顎が長い彼の顔は、緊迫した状況の中でもどこか間が抜け

て見える。
「どういうことなんですか」
「他からの情報じゃないのか」
「他って？」
「知らないよ」長沢が不機嫌に言った。「動き回ってるのは、俺たちだけじゃない。本庁の捜査一課の部屋に座ったままで、情報が取れる刑事もいるかもしれないじゃないか」
「でも、現場はここですよ」筒井は思わず言い張った。
「そんなことはどうでもいいんだ」長沢が面倒臭そうに吐き捨てる。「どこかの筋ではよく知られた有名人かもしれないしな。お前、一柳正起って名前に心当たり、ないか？」
「ないです」即座に断言する。
「俺たちが知らないだけかもしれない。だとしたら、恥ずかしい話だ」歩きながら器用に肩をすくめる。「管内の有名人を把握してないとなったら、大問題だぜ」
　所轄は政治家を筆頭に、一部上場企業の役員以上の人間、芸能人など、管内に住む著名人の住所は押さえている。何かトラブルがあった時に、すぐに対応できるように、だ。一般人と同じというわけにはいかない。
「芸能人、とかじゃないですよね」政治家よりもずっとプライバシーを重視する芸能人なら、こちらの網から漏れている可能性がある。
「勤務先って言ってるんだから、会社員だろう。それにあれが芸能人だったら、せいぜい個性的な脇役だろうな」長沢が皮肉を吐く。「主役級とは思えない」
「そうですかね……それより勤務先、どこなんでしょう」

「聞き忘れたな」無線を取り上げて、一瞬躊躇(ためら)い、長沢がすぐに歩き出した。「直接聞いた方が早い」

確かに。それにこんな所で無線を使って怒鳴っていたら、誰に聞かれるか、分かったものではない。

三分後、指揮車に戻った筒井は、一柳の勤務先が「グランファーマ」だと知った。会社のことはよく分からないが、頭痛薬の「トラセリン」の発売元だと聞いて納得する。実際、自宅の薬箱にも入っているはずだ。

「正確には、グランファーマ総合研究所日本支部になる」メモを見ながら本間が言った。

「研究者ですか？」長沢が訊ねる。

「そのようだ」

「ああ」

何故か納得したように長沢がうなずく。筒井も得心してしまった。研究者――学者。変人でもおかしくない。文系の人間の、勝手(かって)な思いこみかもしれないが。

「一課からの情報なんですよね？」

長沢の質問に、無言で本間がうなずく。一見して不機嫌なのが分かった。現場の面子(メンツ)を潰された、と思ったのかもしれない。

「何で一課がいきなり……」筒井は思わず漏らした。まだ現場にも入っていないのに、動きが速過ぎる。

「いいから、聞き込みを続けるんだ」

本間が低い声で、脅しつけるように言った。筒井は首をすくめ、ワンボックスカーから飛び出す。大粒の雨が首筋から入りこんで背中を流れ落ちたので、首をすくめた。振り向くと、長沢の姿はない。車の中で本間と話しこんでいるようだが、妙に気になった。自分だけが何も知らされず、勝手に事態

が動いていくような……一課が先に情報を手に入れるのは仕方ないと思う。割り出せなかった自分たちが悪いのだ。だが、自分だけが仲間外れになって、上司と先輩が話しこんでいるのは、何だか気分が悪い。

何の話をしているのか聞こうと、車に戻ろうとした瞬間、長沢が飛び出て来た。戸惑いと険しさが入り混じった表情で、本音が読めない。パーカーのフードをすぐに被ったので、ますます表情が曖昧になる。

「どうした」長沢が低い声で訊ねる。

「いや」厳しい声で突っこまれ、筒井は首を振った。

「ほら、行くぞ。一課が入ってくる前に、できるだけ情報を集めるんだ」

本当は、一課は事情が全部分かっているのではないか――既に犯人も割り出しているとか――と、筒井は邪推した。自分たちは事情を知らず、動き回っているだけ。警察は何かと秘密にしたがる組織で、仲間内に対しても変わらないのだが、取り残されるのは嫌だった。

そうならないためには、結局走り回るしかない。むしろ一課を驚かせるような情報を引っ張ってこないと。

早足で歩き出す長沢を追って走り出す。足元で、濡れたアスファルトがびちゃびちゃと音を立て、初めてきちんと取り組む殺人事件捜査の難しさを想像させた。

3

「グランファーマ総合研究所は、現在、世界最高レベルの医療研究機関と言っていい。各地に支部を持ち、それぞれが得意分野で研究成果を競っている」

「新薬とか？」合いの手を入れながら、島泰久（しまやすひさ）は相手――高野（たかの）の本音を見切ろうとした。同期入庁だが、普段は一緒に仕事をしない相手で、顔もよく覚えていない。突然呼び出された後、最初にバッジを示されなかったら、信用しなかっただろう。

「ああ。ただ、目標、やり方はそれぞれの支部に任されている。本社はフランス。支部は現在、ジュネーブ、ロンドン、サンノゼ、東京の四か所にある」

「規模は？」島は言葉を挟んだが、それは会話を潤滑に進めるために過ぎない。意識は、目の前の男を観察することに向いていた。窓もない小さな会議室で、自分は椅子（いす）に腰かけているのだが、高野はまるで背後を取られるのを恐れるように、背中を壁にぴったりとくっつけて立っていた。島がつい貧乏揺すりしてしまうのに対し、微動だにしない。肝（きも）が据わった人間なのか、あるいは精神的に優位に立つための演技なのかは分からなかった。

「東京には三百人」高野が、感情の感じられない声で答える。

「かなり大規模だな」

「いや、この四か所の中では一番小さいんだ」

「東京の研究テーマは？」
「いろいろある。癌の治療に関する研究では、四つの研究所の中で一番進んでいるようだ」
島は思わず身を乗り出した。癌の特効薬……人類の悲願でありながら、未だに実現の見込みがない夢の技術だ。両親とも、早いうちに癌で亡くしている島は、癌に対する恐怖心が人一倍大きい。間違いなく自分も癌で死ぬ……父親が肺癌で死んだ後は禁煙し、母親が胃癌で倒れた時には酒をやめた。仲間内では「健康オタク」と馬鹿にされるが、そういう連中は、癌の怖さを知らないだけだ。
「大きなビジネスだな」島は合いの手を入れた。
「ああ。あんたや俺には想像もできないぐらいに」
何兆円、いや何兆ドル規模……もちろん、医学的にも大きな進歩になるが、それよりも、動く金の大きさに、島は目がくらむ思いがした。
「だが、日本支部の最重要の研究課題は、薬じゃない」
高野のもったいぶった言い方が癇に障った。だが、まずは情報収集が大事、と自分に言い聞かせ、椅子の肘かけをきつく摑んで気持ちを落ち着かせる。
「というと？」
「ナノマシンだ」高野が指先をワイシャツの胸ポケットに入れて、煙草を一本引き抜く。禁煙のこの部屋では吸えるわけもないのに口にくわえ、ぶらぶらさせる。馬鹿者が、と島はつい思った。医療研究機関の話をしながら、癌を誘発させる煙草を手にするとは。怖さを知らない人間は、これだから困る。
「ナノマシン」繰り返しながら、島はうなずいた。
「説明が必要か？」

「少しは分かる」
　分子サイズのロボット……のようなものか。自分の認識の低さに苛立ったが、普通の人の感覚はこんなものだろう。ニュースなどで名前は聞いたことがある、というレベル。高野は、島の見栄に気づいたのか、すらすらと説明を始めた。かなり研究している――仕事のためとはいえ――のが分かった。
「細胞より小さい、ウイルスサイズの機械だと考えてもらえばいい。機械といっても、我々が知っている機械とはまったく違う。金属のパーツを組み合わせた物をイメージしていると間違えるんだ」
「ああ」相槌を打ちながら、島は早くも頭が混乱するのを感じ始めていた。
「例えば、サッカーボールのような炭素分子を使って、タイヤの形を作ることができる。そういう技術は既にあるんだ。何かを運ぶ荷台を作ったり、特定の作業をする腕をつけたり。ある目的に特化した作業用のマシンを作る、というわけだな」
「そこまでは分かる。だが、医療用というのは――」
「癌の治療。今、それ以外に何がある？」高野が、島の言葉を遮って質問をぶつけてきた。
「癌の治療だったら、まず抗癌剤だ。それと手術。免疫療法」
「だが今のところ、完璧な、安全な治療法はない」いつの間にか、高野の台詞回しは歌うように滑らかになっていた。
「ああ」
「ナノマシンの場合、根本的な治療ができる。癌細胞を直接叩くんだ」
「つまり、細胞レベルで攻撃させる？」
「そういうこと」高野がにやりと笑う。出来のいい学生を相手にした大学教授のようだった。「ナノマシンは、細胞よりも――癌細胞よりも小さい。となると、ナノマシンが動き回って、自分よりも大

きい癌細胞を見つけ出すのは難しくないわけだ。それで、癌細胞だけを効果的に叩けば、手術の必要がなくなる。作業内容をプログラミングしたナノマシンを、必要な量だけ体内に送りこめばいい」

島は、そのイメージを想像して、背筋に寒気が走るのを感じた。人間の体とは異質の物体が、血管の中をぞろぞろと移動して癌の患部を目指す……いや、細胞より小さいのだから、血管を経由しなくても動けるのかもしれない。自分の全身を、ナノマシンが静かに動き回るイメージは、あまり気持ちのいい物ではなかった。

「そんなことが、実現可能なのか？」

「フォトリソグラフィーという技術があるんだが、それでかなり小さな物まで作れる」

「フォトリソグラフィー」言葉の意味も分からず、島は繰り返した。自分は相当馬鹿に見えているだろうな、と思う。

「元々は、半導体素子やプリント基板を作るのに使う技術だ。知ってるだろうが、そういうものはかなり小さい。そうじゃなければ、パソコンや携帯電話が今のようにコンパクトになるはずがないからな」

「ああ」

「考え方としては、自己増殖、あるいは超小型の製造ラインを作ることも可能らしい。ナノマシンにナノマシンを作らせるわけだ」

「自己増殖だと、生物と変わらないな」

「ある意味、そういうことだ。ナノマシンに関して否定的な見方をする人は、それを怖がる」

「どういう意味かな？」

「自己増殖機能が、一世代だけなら何ということはない。一つが二つに増えるだけだ。だけど、どこ

かで暴走したらどうなる？　それこそねずみ算的に増えていくだろう。ナノマシンが無数に生まれるんだ。あまり時間がかからずに、陸地はナノマシンで埋め尽くされる」
「イメージが湧かないな」
「地表を覆い尽くして、生物の中にも入りこみ、増殖するための素材になる物体が消えるまで、永遠に増え続ける」
「勘弁してくれ」島は顔の前で手を振った。これでは出来の悪いＳＦかホラーだ。
「実際にはそんなことはないだろうがな……現代の技術は、まずフェールセーフを考える。活動停止するようなプログラムを組みこんでおけばいいんだから」
　高野が確信めいた口調で言った。この話を続けると長くなりそうなので、島は話題を引き戻した。
「で、グランファーマ総合研究所日本支部は、ナノマシンの研究を進めている、と」
「そう……そしてナノマシンにおいて、現在最も重要な課題はエンジンなんだ」
「エンジン？」
「動力源といってもいい。特定の形を作ることはできても、それをどう動かすかは解決されていない。人間の筋肉の動きは、基本的に電気的な反応だということは分かるな？」
「ああ」
「物理的――機械的なエンジンをナノマシンに搭載することはできない。かといって、生物的な仕組みをナノマシンレベルで再現するのは、現代技術ではまだ不可能だ。ナノマシンに心臓や筋肉をつける、というのはできないわけだよ」
「まだ、ということは、将来的には可能性があるわけか」
「それが実現できれば、ナノマシンの実現可能性は一気に増す。今、世界中の研究者が狙っているの

はそれだよ。ノーベル医学賞間違いなしだし、医療技術が根本的に変わるだろうな。再生医療と組み合わせれば、人間の平均寿命は今よりずっと延びるだろう。必ず百歳まで生きられる人生が幸せかどうかは分からないが、生きる時間が長ければ、幸福に挑戦する機会は増えるはずだ」

何を、詩的なことを……しかし、亡き両親のことを考えると、島も感傷的になる。気持ちを立て直して訊ねた。

「一柳も、それを研究していたわけだな」

「ナノマシンのエンジン問題に関しては、世界でトップレベルの技術者といっていい」

「で？」

「理論が完成間近だった、という話がある」

「それは、彼の独自の研究として？」

「そうだ。しかし彼も会社員だから、手柄は自分一人の物ではなく、会社の物になるんだが……会社も十分手当てしないと、後で大変なことになる」

「特許を取って、利益を生み出し始めたら……」

「今後の医療産業の中で、大きな柱になるだろうな。だから十分な金を払わないと、会社が訴えられるかもしれない。特許の権利について、開発した人間にあるのか、申請した会社にあるのかは、難しい問題だ。裁判沙汰にもなっている」

「そうだな……しかし、今はその心配はしなくていいんじゃないか。一柳は死んだ」

「ああ」高野の喉仏（のどぼとけ）が上下した。くわえていた煙草をようやく引き抜き、「あんたの言う通りだ」と認める。

「それで、この話はどこへ行くんだろうか」専門外の話を聞かされ続け、島は軽い頭痛を覚え始めて

いた。既に家に帰っていたのを呼び出され、ほぼ初対面の男と三十分。高野に対する疑念は次第に晴れてきたが――説明は明朗で裏はなさそうだった――それでも疲労感は拭えない。夜も遅いのだ。

「簡単な話だ。うちとしては、おたくと共同で捜査したい」

「まさか」島は思わず鼻で笑ってしまった。この連中の場合、はっきり言えば、「捜査」ではなく「調査」である。相手を監視するのが主な仕事で、立件することなどほとんどない。年に一回でも公判に持っていければ、「今年はよくやった」と派手な忘年会をやるような部署なのだ。

「あんたたちだけでは、収拾がつかないと思う」高野が平然と言い放った。

「うちを舐めてるのか？」

「おっと」高野が薄い笑みを浮かべながら、攻撃を防ごうとするように、両手を前に突き出した。

「お互いに、総合的に物を見なくちゃいけない立場だろうが。こんなところで喧嘩している場合じゃない」

「殺しは殺しだ。刑事部の事件だ」

「それで済めばいいが……今回は済まないだろうな」

高野があっさりと断言した。あまりにも当たり前のように言うので、島も思わずうなずいてしまった。すぐに思い直して「どういうことだ」と訊ねる。

「聞きたいか？　実は――」いきなり高野の携帯電話が鳴った。番号を確認すると、舌打ちして電話に出る。「はい……ああ、その件は分かってる。判子は明日で間に合うから。今、手が離せないんだ……いや、庁舎内にいるけど、忙しいんだ」

切った電話を憎々しげに睨みつける。

「なかなか勝手にさせてくれないな」

「この時間でも仕事か」
「うちだって忙しいし、俺にも立場がある。書類が全部回ってくるんだから……それより、話の続きだ。一柳は、うちも追いかけていた人間なんだ。これだけデータがあるんだから、信じてもらえると思うが」
「ああ」この男の喋り方は気に食わなかったが、それは認めざるを得ない。
「この件は、下手をすると政治問題――外交問題に発展する可能性がある。殺しの捜査は、今まで通りに所轄を軸にやればいい。その間に、こっちとしては背後に何があるか、調べておくつもりだ。捜査一課の方で、手を貸してくれないか？」
「そういう事件だったら、おたくの専門だろうが」
「そういうことを言ってる場合じゃない。今回は、捜査一課の力が必要なんだ」
この男にすれば大きな譲歩だな、と島は思った。刑事部と公安部の諍いの歴史を考えれば……公安畑を歩き続けるこの男が、刑事部に対して対抗心を抱いていてもおかしくはない。だが、それを克服して、頭を下げている――下げてはいないが、下げたも同然だ。
こちらも腹を据えてかからなくてはいけない、と島は覚悟を決めた。

4

「間違いないですか」

長沢の問いかけに、グランファーマ総合研究所日本支部の総務部長、清岡が無言でうなずく。顔色は白く、引き結んだ唇からも血の気が消えている。多くの人が、葬儀などで遺体を見た経験はあるはずだが、他殺死体となると話は別である。

「……間違いありません」

渋谷中央署の遺体安置所。筒井は故人の顔にそっと布をかけた。それでようやく緊張が解れたようで、清岡が盛大に息を吐く。背筋をゆっくりと伸ばし、目尻に溢れた涙を人差し指でそっと拭った。この涙の意味は……筒井は彼の顔を観察した。綺麗に七三に分けた髪。急遽呼び出されたせいか、ワイシャツには皺が寄っていて、ネクタイもしていない。ほっそりとした男で、支えていないと倒れてしまいそうだった。

長沢もその様子に気づいたのか、清岡の背中にそっと手を当てる。清岡がびくりと背筋を伸ばし、長沢の顔を見た。

「出ましょう。確認だけしてもらえば十分ですから」

清岡が無言でうなずく。ドアに向かう足取りは、小柄な彼にしては大股だった。廊下に出ると、大きく深呼吸して天井を仰ぐ。

「これからちょっと、話を伺います」長沢が告げる。

「ここで、ですか？」ぎょっとしたように目を見開く。死体の近くにいるのが、よほど怖いらしい。確かに、遺体安置所がある渋谷中央署の地下一階には、死の臭いが濃厚に染みついているのだが、反応が極端過ぎる。

「楽に話ができる場所にしましょうか」

長沢は、清岡を一階にある失踪人捜査課の分室に誘った。失踪人捜査課は、都内を三つに分けて管

轄する分室制度で、渋谷中央署には三方面分室が間借りしている。どうしてここを……最後に入ると、ソファで、一人の男が寝ているのが目に入った。こちらの気配に気づくと、むっくりと起き上がる。長沢が一言挨拶して、一角にある面談室の鍵を借り、さっさと入って行った。

中へ入ると、長沢がここを選んだ理由がすぐに分かった。警察臭が薄いのだ。決まりきった什器（じゅうき）ではなく、特別に用意されたであろうテーブルや椅子はポップな色合いなので、ＩＴ企業の会議室のような雰囲気（ふんいき）もある。ただし、ガラス窓の向こうが駐車場というのはいただけない。それでも清岡は、警察らしからぬ雰囲気の部屋に入って、何とか落ち着いた様子だった。

「筒井、悪いけど、お茶を用意してくれ」

「何にしますか？」

悪いけど、はいらないだろう……下っ端の自分に対する過剰な気遣いに苦笑しながら、筒井は用意してきたノートパソコンをテーブルに置いて訊ねた。長沢が清岡の顔を見る。コーヒー、紅茶……様々な飲み物が頭の中を去来した様子だったが、清岡はかすれた声で「水をいただけますか」と言うだけだった。

筒井は、一階の交通課近くにある、自動販売機が固まった一角まで走った。ペットボトルを三本買い、まとめて抱えて立ち上がった瞬間、自動販売機のプラスティックのカバーに自分の顔が写りこむ。疲れは……ないな。床屋に行く暇がなくて、髪が耳を完全に覆うぐらいに伸びているのが鬱陶（うっとう）しいだけだ。課長に「髪ぐらいきちんとしておけ」と言われるのだが、時間がないのでしょうがない。顔つきはといえば、最近少しだけ目つきが鋭くなってきたように思う。これが刑事らしい顔かもしれない。この事件を経験して、また表情が変わるだろう。

また走って失踪課に戻る。どうやら正式な事情聴取はまだ始まっていないようで、二人は緊張感の

ない低い声で話をしていた。筒井は二人の前にペットボトルを置き、自分は長沢の横に座った。すぐにパソコンをスリープモードから復旧させ、メモの準備に入る。
「楽にして下さい」長沢が切り出した。「まず、一柳さんのご家族のことなんですが……こちらで知らせなければならない相手はいますか？」
「あの、娘さんは？」
「結婚していたんですか？」長沢が鋭い口調で確認する。この情報は初耳だ。
「奥さんは亡くなったんですが、娘さんがいるはずです」
「あの家にはいませんでしたよ」
　いや、いる――いたのかもしれない。筒井は、先ほど調べた家の中の様子を思い出した。一階がリビングダイニングルームと水回り、二回には八畳の部屋が三つある。うち一つが一柳の寝室、もう一部屋はほぼ物置として使われていたようだが、残る一室が完全に空き部屋だった。妻を亡くしていても、娘がいるのだったら、３ＬＤＫの一戸建てに住んでいてもおかしくはない。空き部屋は娘の部屋ということなのか。誰かが住んでいる気配はないのだが……。
「いない？」清岡の顔が再び蒼褪めた。「いないってどういうことですか」
「いや、それは我々の方が聴きたいですよ」長沢が気色ばんで言った。「どう見ても、一人暮らしでした」
「それは……ちょっと変だな」清岡が額を揉んだ。ゆっくり目を開けると、携帯電話を取り出す。
「会社の方に連絡させていただいていいですか？　人事の担当者を待機させてありますので」
「どうぞ」
　長沢が、清岡から視線を外さずに、ペットボトルのキャップを開けた。水をちびちびと飲みながら、

彼の様子を見守る。清岡は、長沢の視線から逃れるように、うつむきがちに電話をかけ始めた。
「ああ、清岡です。悪いんだけど、一柳君の個人カードを確認してくれないか？　そう、家族について知りたいんだ」電話を掌で押さえ、顔を上げる。「今、調べさせています。ちょっと待って下さい」
長沢が無言でうなずく。筒井もキーボードに置いた手を離し、水を一口飲んだ。走り回っていたのと興奮のせいか、やたらと喉が渇く。タスクバーの時計が視界に入った。日付が変わって一時間が経っている。
「……ああ、はい。そうだよな、娘さんがいるんだよな」相手の話に意を強くしたのか、清岡が背中を伸ばす。手帳を取り出して、猛烈な勢いで相手の言葉を書きつけ始めた。「ちょっと待て、住所はどうなってる？　それ、前の住所じゃないか。じゃあ、こっちに何も知らせずに勝手に引っ越してたってことか。それはまずいよな……いやいや、そんなことはどうでもいい。それより、娘さんの情報、何かないのか？　そうか……分かった。ちょっと調べてくれ」
電話を切って、困ったような視線を長沢に向ける。
「娘さんは、いるんですね」念押しするように長沢が訊ねる。
「書類の上では、ですね」
「どういうことですか」
「ちょっと整理させて下さい」清岡が手帳を見下ろした。ひどい悪筆で、反対側から見ている筒井には、まったく読み取れない。声を出さずに唇を動かしながら、眉間に皺を寄せて手帳を凝視する。顔を上げると、「最初から説明します」と毅然（きぜん）とした口調で言った。
「お願いします」
長沢が言うのに合わせて、筒井はキーボードに指を乗せた。タイピングのスピードには自信がある。

「一柳は、三年前に奥さんを病気で亡くしています。私も葬儀には出ました」
「その頃はどこに住んでいたんですか」
「東急池上線の石川台なんですが……マンションでした」
「代官山に引っ越してきた記録はないんですか？」長沢が首を捻る。
「ええ。私はたまたま本人から聞いて知ってましたけど」
「いつ引っ越したんですか」
「年明け、ですね。半年ぐらい前です。でも、会社の公式な記録には残っていない」
「それは変ですね」長沢が首を傾げる。「いろいろと問題になるでしょう？」
「そうなんですよ。何かあった時に困るわけで……意味が分からない」
「たまたま忘れただけとか？」
「ああ」その一言で納得したようで、清岡がうなずく。「確かに、少し抜けたところがある人間でしたから。抜けたというか、細かいことは気にしないというか」
「でも、娘さんのことはどう説明します？　家にいないみたいですよ。部屋が一つ、余っていました」
「分からないな……」清岡が拳のつけ根で頭を叩いた。「娘さんの名前は、美咲さんです。今、十四歳ですね。中学二年生になるはずですが」
「会社の記録には、どこの学校に行っているかは書いていないんですか？」
「そこまではないんです。生年月日が分かるだけで」
「変ですね」
二人のやり取りをパソコンに打ちこみながら、筒井は自分も首を傾げていた。子どもがいるはずな

のに、子ども部屋がない。どこか別のところで暮らしているのだろうか。例えば全寮制の学校に入って……あり得ない話ではない。
「その辺、社内で調べてもらえませんか？」長沢が頼みこんだ。「一柳さんと親しかった人、いるでしょう？　普通、家族のことも話しますよね」
「調べてみます。分かればすぐに連絡しますよ」清岡が腰を浮かしかけた。社内での調査は面倒だろうが、ここで長沢と対峙するよりはましだ、と考えているのだろう。
「他には誰かいないんですか？　ご親戚とか」
「いないようですね。ご両親は亡くなっているはずですし、兄弟もいない……あと、可能性があるとしたら奥さんのご家族ですが、そちらに関しては情報がないんです」
「分かっても、大変かな……」
長沢が自分に言い聞かせるように言った。その「大変」の意味は、筒井にはすぐに分かった。この後、家族に待っているのは葬儀である。三年前に亡くなったという妻の実家と一柳が現在もつき合いを保っているかどうかは分からない。関係が薄れているとしたら、葬儀を任せるのは一苦労だろう。警察が心配する問題ではないかもしれないが……。
「娘さん、どこか全寮制の学校に入っている可能性はないですか？」筒井は訊ねた。
「どうでしょう。残念ですけど、そこまで詳しいことは知らないので……とても賢い子らしいですけどね」
「そうなんですか？」
「あの、ジュニア数学オリンピックってご存じですか？」
清岡が唐突に切り出す。聞いたことがあったので、筒井はうなずいた。うなずき返して清岡が続け

る。
「小学六年生の時に出てるんです。何でも特例だったらしいんですけどね。本当は中学生対象なのかな？　で、そこで金賞を取っちゃったそうで」
「すみません、それって凄いことなんですか？」自分にはまったく関係のない世界で、どうにもぴんとこない。
「たぶん……そうですね」自信なさげに、清岡が認めた。「スケートのジュニアの選手が、一般の大会に出ていきなり優勝するようなものかもしれません」
　スポーツと数学では単純に比較できないが、図抜けた存在だったのは間違いないようだ。その頭脳は、優秀な研究者だという父親譲りなのだろうか。どうも、自分が知っている普通の家族とはだいぶ違うようだ。
「一柳さんが殺されるような理由に、心当たりはありませんか」
　それまで家族中心で話してきたのに、長沢がいきなり本筋に切りこんだ。清岡が背筋をぴしりと伸ばして、喉仏を上下させる。
「私には、分かりません」
「会社として、何か把握してるんじゃないですか」
「それはないです」
「一柳さんは、普段はどんな仕事を？」
「ちょっと専門的になりますけど……私も把握できていないこともあります」
「総務部長なのに？」
「研究の内容まで知ることは、私の仕事じゃありません。彼らが快適に仕事できるようにするのが仕

事ですから」清岡がむっとして言った。
「それは分かります」少しだけうんざりした口調で長沢が言った。「でもとにかく、話して下さい。話してくれないと、専門的なことかどうかも分かりませんから」
「ナノマシンについてなんですが」
会話が途切れた。清岡が、少しだけ自慢気な表情を浮かべるのを、筒井は見逃さなかった。だから言ったじゃないか、と非難するような視線に変わる。
「細胞より小さな機械、ということですよね」
筒井が助け舟を出すと、清岡が悔しそうに唇を引き結んだ。自分が優位に立てるチャンスを失った、と思っているのかもしれない。
「まあ、簡単に言ってしまえばそういうことです」
「医療用にも応用できるんですよね」
「だからこそ、世界中の大学や製薬会社が必死に取り組んでいるんですよ」
それからしばらく、清岡によるナノマシンの講義が続いた。筒井は何となく話についていけたが、長沢は早々とギブアップしてしまったようだった。筒井は時折質問を挟みこみながら、必死でメモを取った。清岡は終始真面目な表情だったが、筒井が「これが実現できたらノーベル賞ですよね」と持ち上げた時だけは笑みを零した。
「ちなみに、どんな人なんですか」
「メモ魔。バックアップ魔」清岡が寂しそうに笑った。「理系の人間にはよくいるタイプですが、何でもかんでも記録しておくんですね」
「心配性、ですか？」

「というより、それが当然だと思ってるんでしょう」

午前二時近くになって、ようやく清岡に対する事情聴取は終わった。後半はほぼ彼の独演会で、結局犯人に対する手がかりはなし。一柳は自宅と研究所の往復ばかりの生活だったようで、私生活は謎に包まれていた。

遅くなっていたので、さすがに特捜本部の捜査会議は翌朝に持ち越された。しかし本間が、刑事課のメンバーを集めて現状を説明してくれた。ともすれば眠りに引きこまれそうになる間延びした声が、本間の疲労を感じさせる。特捜本部が置かれる大会議室ではなく、いつも詰めている刑事課の大部屋で、というのも、緊張感を削ぐ原因になったはずだ。

「緊配では何も引っかからなかった」

否定的な一言から始まった説明を聞きながら、筒井は時間軸をもう一度整理した。通報の内容「大きな音がする」というのは、複数の人間が揉めて争っているのが聞こえたのだろう。実際に一柳が殺されたのは、その後のはずである。通報があってから、最初に警察官が駆けつけるまで七分かかっているから、犯人が一柳を殺して家を立ち去るまでの時間は五分……もしかしたらもっと短かったかもしれない。ということは、犯人はそれほど遠くへ行っていなかったはずだ。しかも徒歩で逃げた可能性が高い。代官山駅から近いあの辺りは静かな住宅街で、あの時間に車が急発進したりすれば、間違いなく誰かがその音を聞いているはずだ。現時点では徹底した聞き込みが行われたのに、誰も何も聞いていない。

わずか数分で、走って現場から逃げ出す……車を停めておいても目立たない旧山手通りまで徒歩で逃げて、そこからは車を使ったのではないか、と想像した。一柳の家から旧山手通りまでは、必死で走れば一分か二分。この推理には無理がない、と自分で納得した。それだけ素早く動けば、緊急配備

に引っかかってこないのも分かる。
「一柳のパーソナルデータについては、以下の通りだ」
本間が説明する内容は、既に筒井の頭に入っているものだった。ただその後に続いた、他の聞き込みの報告が引っかかる。「変な人」という評判が、あちこちで出て来たというのだ。例の、引っ越しの時に郵便受けにタオルを投げこんだという話は、どこの家でも聞かれたという。しかし、一柳と言葉を交わした人間がまったく見つからない。いかに東京が他人に無関心な街とはいえ、会えば挨拶ぐらいはするだろう。マンションなどの集合住宅ならともかく、一戸建てに住む人は、それなりに近所づきあいを考えるはずだ。
だが、その常識は一柳には通用しないようだった。当然、近所の人と顔を合わせることもあったようだが、挨拶どころか、目を合わさないようにうつむいてしまうことが多かったという。そのため、「何かおかしなことをしているのではないか」と疑っている人もいたらしい。極度の人嫌い、変わり者ということなのだろうが、あまりにも異質な存在を見ると、普通の人は疑いだす。
ジャージ姿――恐らく、殺された時に着ていたものだろう――で、朝六時頃にうろついていたのを見た人もいたという。何か目的があってではなく、ただうろうろしていた。腕組みをし、聞こえないぐらいの小声でぶつぶつぶやきながら、家の周りを歩き回る。薄気味悪い光景だったはずだ、と筒井は想像した。
そしてもう一つ、重要かどうかは分からないが、決定的な情報。
誰も娘の美咲を見ていない。
どうやら、あの家に引っ越して来た時、娘は既にいなかったようだ。中学生なのだから、少なくとも朝は毎日同じ時間に家を出るはずなのに、半年以上誰も姿を見ていないということは、あの家には

美咲は住んでいない、としか考えられない。この娘が捜査のポイントになるかどうかは分からないが、見つけ出さなければならないのだ。もしかしたら、被害者の唯一の肉親。中学生の娘に、父親の死の始末を任せることはできないだろうが、知らせないわけにはいかない。

「――現在分かっている情報はこれぐらいだ。明朝、捜査会議は午前八時召集。あまり時間はないが、できるだけ体を休めてくれ」

その言葉で、打ち合わせは解散になった。背中に重い張りを感じながら立ち上がった筒井は、思い切り伸びをした。一度家に帰っていたので、一日を二回送ったようなものである。今夜はどうするか……家はそれほど遠くないので、タクシーを奢(おご)れば帰れないことはない。自宅のベッドはひどく魅力的に思えたが、往復にかかる時間を節約して、少しでも睡眠時間を稼ぐことにした。道場に布団を敷けば、すぐに眠れる。刑事課のメンバーもほとんどがそうするはずだ。埼玉県から通っている人もいることだし……だいたい自分は、明日の朝遅れるわけにはいかない。捜査会議が始まる前に、先輩たちのために眠気覚(ねむけざ)ましのコーヒーを用意するのが、新入りの役目なのだ。

「ちょっとつき合えよ」長沢に言われて、頭の上で伸ばしていた腕を下ろす。

「何ですか？」

「煙草」

筒井は吸わないのだが、先輩が「つき合え」と言うなら仕方がない。一階の駐車場に出て、隅にある喫煙場所に向かった。署の敷地内で唯一煙草が吸えるこの場所は、この時間だというのに煙草をふかす人たちが多く、白く煙っていた。それだけ今夜は、帰りそびれた人が多かったということなのだろう。

長沢は煙草に火を点(つ)けると、夜空に向かって煙を吹き上げ、一瞬手元の煙草を見詰めてから、灰皿

から離れた。人に聞かれたくないらしい、と気づいて筒井は彼の側に寄った。
「例のナノマシンの話、よく分かったな」
「分かってるわけじゃないです。何かで読んで覚えていただけで」その「何か」が何だったのかも思い出せないが、筒井は記憶力だけには自信があった。一瞬見た物を、意識せずとも記憶してしまう。電車の中吊りなど、特にそうで、週刊誌を読みもしないでその週の内容が頭に入ってしまう。もちろん、週刊誌の見出しは、往々にして羊頭狗肉になり勝ちで、覚えていても意味はないのだが。
「ややこしい話になりそうじゃないか」
「そうですか？」
「被害者が訳の分からない人間なんだから」
「まあ、そうですね」
長沢が、不味そうに煙草を吸って、咳きこんだ。今日何本目の煙草なのだろう……一件聞き込みが終わる度に煙草に火を点け、忙しなく吸っていたのを思い出す。
「仕事もそうだけど、かなりの変わり者なんじゃないかな。近所づきあいがないとか、そういうレベルじゃないぞ」
「確かにそんな感じですね」
「裏の顔があるんじゃないかな。殺されるほどのトラブルは、普通のサラリーマンじゃ考えられない」
「ええ」
「仕事のトラブルだったら面倒だぞ。あの、訳の分からないナノマシンの話なんか、俺には無理だな」

この弱音（よわね）は本物だろうと思ったが、筒井は「大丈夫でしょう」と先輩を勇気づけた。こういう風にするのも、後輩の役目だろうと思いながら。

「お前、難しい話は頼むぞ。頼りになりそうだから」

「無理ですよ」また、無用に俺を持ち上げている。ここへ誘ったのだって、何も話がしたかったからではないだろう。お前は仲間だ、信頼しているというポーズを見せるため。そんな風に、本間課長に指示されているとしたら、辛い業務だ。苦笑して、筒井は首を振った。「俺だって、表面だけですから。本当はどういうものか、全然分かってないです」

「だけど、俺よりは詳しいんだから……問題は、仕事以外の部分でのトラブルだな。何だか一柳って、会社の人間も知らない顔を持ってそうじゃないか」

「そうかもしれません」

そうなるとやはり、引っ越した事実を会社にも正式に伝えていない、というのが引っかかる。何か会社に隠し事をしているのではないだろうか。住所ぐらいならともかく、もっと重要な秘密を……。

「俺は、娘の方が気になります」

「それもそうだな」長沢がうなずいた。

「中学生ですよ？　一緒に住んでいないのは、変じゃないですか」

「確かにな」長沢が、灰皿に煙草を捨てに行った。まだ灰皿の周りに人がたくさんいたので、そこには留まらず、新しい煙草に火を点けて戻って来る。「近所の学校を虱潰（しらみつぶ）しにすれば、在籍しているかどうかはすぐに分かるだろう」

「そこにいなかったらどうしますかね」

「前の住所を当たるしかないだろうな。引っ越す前……一年前だったら、十三歳で中学一年生か。付

近の中学校と小学校を当たればいい。いくら何でも、小学生だったら、親と一緒に住んでいないのはおかしい」

「そうですよね」面倒臭いが、彼の言う通りに調べていけば、美咲には辿り着けるだろう。ふと、ほとんど意識しないまま、言葉が口をついて出た。「娘を捜すの、俺がやってもいいですかね」

どうしてこんなことを言い出したのか、自分でも理由は分からなかったが、何か一つ、きちんと仕事をしてみたい、という意識はある。筒井はまだ、刑事課で――あるいは警察での居場所を見つけていない。何をやったら蹴り出され、何をやったら褒められるか、見当もつかないのだ。周りが気を遣っている理由は分かっていたが、こんな状態は長くは続くまい。向こうも、こちらの様子を窺っているだけなのだ。ひどく気詰まりで、真綿で首を絞められるような毎日。もしもここできちんと実績を残せば、自分と周囲の間にある薄い膜は破れるかもしれない。どこか白けた気分を拭い去って、本物の刑事になれるのではないか。とにかく、こんな中途半端な、宙に浮いたような状態は願い下げだった。そして実績を作るために、娘を捜すのは適切な仕事に思えた。極めて重要だが、それほど難しいわけではあるまい。

「まあ、希望ははっきり言うべきだな」長沢の言葉は歯切れが悪かった。「たぶん、考えてくれると思うから。だけど、どうして娘のことがそんなに気にかかる？」

「いや……何ででしょうね」純粋に娘の身の上を案じてはいる。だがそれより、自分だけで何事かを成し遂げたい、という気持ちが強かった。それを長沢に告げるのは、気が進まない。言えば、向こうはまた変に気を遣うかもしれないのだ。

「ま、言うだけ言ってみろよ」長沢が慎重な口調で言った。「でも、あまり期待するなよ。自分の勝手で動けないのがこの世界だし、特に特捜事件になると、どうしようもないぞ。歯車の一つになった

つもりで動いた方がいい。そうしないと、全体の流れが狂うからな」
指示する上の判断が間違っていたらどうするんだ……そう思ったが、言葉を呑みこんだ。今の自分は、そんなことを言うべきではない。その言葉は爆弾だ。
「何か、厄介な事件になりそうだな」
溜息（ためいき）を一つついて、長沢がまだ長い煙草を足元に放り捨てた。丁寧に踏み消し、筒井の顔を一瞬見てから踵（きびす）を返して非常口に歩いて行く。一人取り残された格好になった筒井は、彼が捨てた煙草を拾い上げて灰皿に捨てた。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。